



なぜ今ストーリーテリングか

前田 Dworkin 素子 (©Motoko Dworkin 2010)

ストーリーテリングはマスコミで取り上げられることもまだ少なく「何のためにやっているのか」と日本、^②アメリカを問わずよく聞かれます。またストーリーテリングは子供向けのものでしかないという偏見も残念ながらあります。しかし日本に落語や講談があるように、どの文化にも伝統的な「語り」の芸は存在します。それが現代に生きる私たちにとってどういう意味を持つのかについて、いくつか私見を述べたいと思います。

まず第一に、観客としての私たちは良くも悪くもテレビや映画などの映像文化に慣れすぎている。家に帰ればまずテレビをつけ、休みの日にはDVDを楽しむ私たちですが、生のお芝居や落語に接する機会は案外少ないものです。この映像というメディアの氾濫が私たちの想像力、その場に見えないものを頭の中でイメージする能力を蝕んでいるのではないか。

たとえば、ストーリーテラーが「昔々あるところに一本の古い桜の木がありました。」と言ったとします。聞いている人は一人一人違った桜の木のイメージを思い浮かべるでしょう。木の大きさや枝ぶりだけでなく、風の音、空気におい、幹をさわった時の感触まで想像できる人もいるかもしれない。しかしこれがテレビドラマなら、まずポンと実際の桜の木を見せてしまいます。木の様子も背景も視聴者全員が一つの固定されたイメージを受け取ることになり、個人個人の想像の余地はほとんど無いわけです。

人間の喜びや悲しみ、戦争や災害もテレビの画面やスクリーンを通して見ると単なる二次元の「情報」になってしまう。(最近では3Dテレビなんてものもありますが)映画を見て感動して涙を流すなどということも時にはあるかもしれませんが、ほとんどの場合私たちは、ドラマを見てもニュースを見ても「ああそうか」と事実や筋書きを把握するだけで、他人の体験や感情に深く想像力を働かせるということがない。そんな必要を感じないばかりか、むしろそんなことをしない方が楽に生きていけるという状況にはまっているのです。

生の舞台やライブコンサートを見ると、演者の芸の向こうにその人の生き様が透けてみえることがある。目の前で汗をかいたりつばを飛ばしてしゃべったり歌ったり、まさに舞台の上で「生きている」人間を見て観客も生きるエネルギーをもらうわけです。そして一人一人が自分の人生体験に基づいた想像力を駆使して、演者の演ずる物語の完成に参加できる。演者と観客が同じ時間と空間を共有することによって、一つの世界を構築していく。これがナマの舞台の醍醐味であり、ストーリーテリングの真髄でもあります。

次にこのことを演者の立場から見てみましょう。ストーリーテリングは高尚なゲイジツなどではなく、庶民の娯楽です。誰でも、何歳からでも始められます。プロとアマチュアの区別などもある意味あいまいなものです。(お金を貰えばプロなのか、というような「プロの定義」はまた別の機会にゆずるとして)どんな人にもその人固有の人生経験があり、「これを伝えたい」



という思いがある。しかし一度始めてみれば上達の余地は限りなくあり、名人といわれる先達に学びながら自分だけの芸を確立していく。これは一生かかっても達成できるかどうかわからない、気の遠くなるような道のりです。

では演劇とストーリーテリングはどう違うのか。ストーリーテリングは演劇の一形態だという意見もあれば、演劇は広義のストーリーテリングに含まれるという考え方もあり、どちらにも一理あります。演者の視点から見ると、ストーリーテラーはいわゆる普通の演劇の俳優と比べて、より多くの「自由と責任」があるといえるでしょう。何しろ脚本、演出、出演を一人でこなすのですから、オーディションで落とされることもなければ、自分の意見が通らないということもありません。しかしその一方、観客に対する責任ははるかに重い。尊敬する桂米朝師の言葉を借りるなら「大勢のお客さんを一人でお守りさせていただく」のはなかなか大変です。

自分一人の世界にはまりこんでしまうことなく、周りの状況や聞き手の状態に気を配りながらも、物語の人物や状況を生き生きと描き出し、聞き手を物語の世界にいざなう。観客に物語の世界で存分に遊んでいただき、最後はちゃんと安全に現実に戻っていただく。ストーリーテラーとは、ツアーコンダクターのようなものかもしれません。何らかの非常事態（ドアがバターンと閉まるとか、お客さんが痙攣をおこすとか）が起きても、見て見ぬふりをせず、臨機応変に対処する。あらかじめ演目が決まっているような場合でも、同じ話を全く同じようにすることはありえません。「この場に居合わせたこの人たちにピッタリの話をもっとピタリの方法で」するのがストーリーテラーの仕事なのです。

最後に現代におけるストーリーテラーの役割についてもう一つ。今日多くの芸術、芸能、娯楽は生産と消費をとまなう経済活動でもあり、利潤追求という側面を持っています。そのことの良し悪しはともかく、「てっとり早くお金になるもの」を追求する過程で取りこぼされるものもたくさんある。ハリウッド映画の例を見るまでもなく、動くお金が大きければ大きいほど、リスクを避けて「すぐ売れるもの」を作らなくてはいけない。わかりやすいもの、おもしろおかしいもの、派手なもの、型にはまったもの、視覚に訴えるスピードや暴力ばかりが強調されることになります。しかし一見地味なもの、平凡なもの、難解なもの、古くさいもの、既存の体制に合わないものの中にも実はきらきら光る宝石がひそんでいる。それらを発見して磨き上げ、人々の注意を促すこともストーリーテリングの役目です。ある意味「落穂ひろい」のような、すきまをうめる芸ともいえるかもしれません。

太古の人々の夢や知恵、名もなき昔の人の人情の機微、歴史の影に隠された真実など語り継がれるべき物語はこの世にあふれています。それらは私たちの人生を豊かにする財産であり、未来への遺産でもあります。それを自分の感性で取捨選択し、自分の言葉で伝えていく。と言っても何もこむずかしいことを言うのではなく、聞き手といっしょに笑ったり泣いたり、一瞬の感動をわかちあう。「一期一会」の芸、それがストーリーテリングだと思います。



Motoko (前田 Dworkin 素子) プロフィール (www.folktales.net)

大阪府堺市出身。国際基督教大学卒。パントマイムを清水きよし氏、Tony Montanaro 氏に、ストーリーテリングを Elizabeth Ellis 氏に師事する。マサチューセッツ州立大学アジア言語学部日本語科講師をへて、1993年よりストーリーテラーとして全米各地の小中高、大学、図書館、美術館、フェスティバルをまわり、日本のや中国の民話、落語や禅に題材をとった小噺、自らの在米体験にもとづいたオリジナルの作品などを語っている。アメリカの有名な子供向けテレビ番組 Mr. Rogers' Neighborhood にパントマイムアーティストとして出演。2003年にはカーネギーホール主催の CarnegieKids の一員として宮崎県を巡演。同じく2003年、全米ストーリーテリングフェスティバルに（日本人としてはおそらくはじめて）出演。（その後2007、2011、2016年に再出演）ストーリーテリングの CD も4枚リリースしており、Parents' Choice Award, Storytelling World Award など各賞を受賞。数少ないアジア系の語り手の一人として活躍中である。2017年、全米組織である National Storytelling Network により「長年にわたってストーリーテリングに貢献し、その芸術的価値を高めた者に与えられる」The Circle of Excellence Award を受賞した。